

あなたへ

学年部長 Letter

第6号

2 学年部長 津野 誠司

「Bohemian Rhapsody」

あの日、大坂なおみの世界ランキング 1 位決定のニュースでも見ようかと TV をつけたらまさに「嵐」が TV 回線、ネット回線、あらゆるメディアで吹き荒れていた。一芸能グループの解散が NHK でもトップニュースになるのかと唾然としたが、「日本カルチャー」的にはもはや単なる芸能人の話ではなく、平成の終わりを象徴する現象であるらしい。僕は基本的にバラエティーやお笑い番組を見ないので、この手の話題に本当に疎い。前に、「嵐」と「キンキキッズ」は違うのか、と聞いた時の、ガラパゴス諸島で新種の生き物を発見したかのような家族の表情にはびっくりした。(そんなに俺やばいの?) 発見された「新種」が発見した人間たちに驚いているのだから、そりゃ異種なわけだな。

芸能関係に興味がないのはおじさんだからではなく、昔からのことだ。Funny なことはわかるけど Interesting じゃない。だから笑っててもしばらくするとチャンネルを変えたくなる。TV を消して音楽を聴きたくなる。

音楽と言えば、これも昔から好みが変わっていた。高校時代の友人たちはロックに目覚めていった。レッドツェッペリン、イーグルス、ピンクフロイド、、、僕もその波に乗ろうとアルバムを借りて聴いてみるのだけれど、良さがわからない。「エアロスミスの音楽は宇宙的だ」と言われて視聴するけど、どこが「宇宙的」なのか全く理解できない。バチャバチャガンガン音が小爆発を起こしているようにしか聞こえない。よっぽどブルックナーの交響曲の方が宇宙的だし、バーンスタインによる新世界交響曲の涙が出るほど情熱的な音のうねりに身も心も奪われてしまう。まあ、嗜好だからね、音楽も。

先日、大ヒットした映画『ボヘミアン・ラブソティ』を観た。ロックに全然興味が持てなかった僕も、クイーンだけは少し思い入れがあった。

ほぼテニス一色だった高校時代、僕は自主制作映画を 2 本作った。これもテニス関連なんだけど、テニス部の卒業祝賀会の出し物として作ったものだ。1 年の終わりと 2 年の終わりにテニス部の同期を役者にして、テーマも脚本も監督も編集もすべて自分でやって 1 時間弱の映画を作った。今考えてもよく作ったなと思う。当時は今のようムービー機器はなく、マニュアルチックな親父の 8 ミリ撮影機を借りて撮り、それをカメラ屋さんに持って行って現像してもらい(特急と赤書きしてもらっても 3 日はかかった)、そのフィルムを切り貼りして編集するのだ。音声と音楽は後日録音して編集。放課後や土日に演技の指示をしながら撮影して平日の夜はひたすら編集。睡眠は学校の椅子の上。こういう決して誉められない毎日を繰り返して、当然テストは悲惨。追試の日程もチェックしながら進級だけはせめて、、、みたいなね。ひどいでしょ。(書いていいのかな、こんなこと)

映画制作で僕の一番の弱点は「音楽」だ。クラシックがバックミュージックじゃダメでしょというくらいはわかる。それで同期に頼んだ。とくに一番のクライマックス、海のシーンに使う音楽にはこだわってた。「クイーンのボヘミアン・ラブソティがいいんじゃないか?」仲間はそう言った。「ボヘミアン・ラブ、、、何?」「ラブソティ!」

夜、借りた LP レコードを丁寧に置いてターンテーブルを回し、静かに針を落とす(この小さなドキドキ感、ワクワク感は CD、DVD 世代にはわかんないだろうなあ。かわいそうに…)

そして、あのサビの部分へ…

Mama, I just killed a man. Put a gun against his head, pulled my trigger, now he's dead.

この歌詞の内容からは想像もつかない美しすぎるメロディ、とめどもなく溢れる叙情…

これはロックなのか？ ロックって何だ？ 今までの音楽に対する既存の枠組みが根こそぎ崩れていく心地よさを感じた。

「ボヘミアン・ラプソディ」のメロディをバックにして、稚拙だが思いのこもった映画は完成した。

さて、3月14日。「2学年合唱祭 in 県民会館」

朝、放課後、合唱の歌声があちこちの教室から聞こえてくる、その祝福感は言葉で表現できない。あの包み込んでいく優しさは何だろう。何という温かい幸せに満ちているのか。歌っている君たちにはよくわからないかな。合唱って、太古から神の祝福として歌われてきたし、農耕の喜びとしても口ずさまれてきた。君たちの合唱で、北越高校の校舎も北越高校の歴史も、君たちのクラスも君たちの先生も、もちろん君たち自身をも、ここにかかわるすべてのものを祝福しているような気がしてならない。

Chorus = Celebration !

今回、担任の先生たちにも賛成をもらって、3分間のフォトムービーも作ってもらうことにした。それはこんな思いからだ。

今回の合唱曲『正解』は、1年後の「卒業式」で君たちがこの北越高校に残していく最後の贈り物だ。仲間への、先生への、親への、後輩への、感謝の表現だ。これからの1年、ゴールで歌う『正解』に向け、旅立つ空を決めて滑走路を走り抜けてほしい。でも、君たちは人生17年目の「今」を生きていることも決して忘れてほしくない。「今」の人生を精一杯生きられない人間が、将来ならば「自分らしく」「精一杯」生きることができる、そんなことはあるはずがない。今やらないことを将来に先送りして、将来の自分に「精一杯」生きることを課す——それは未来への押しつけであり、未来への借金である。たとえ自分が誇りを持って伝えられる「今」を持っていないとしても、生きているここで、それを見つける努力はしたいよね。決して格好いいことじゃなくてもいい。地道な些細なことでもいいのだ。それは「18 祭」の番組でもいくつか紹介されていた。引きこもって友人もいなかった子が一步を踏み出して行動すること、それだって立派な「今」だ。トライもチャレンジもせずに、「歩み」を未来に先送りすることは決してするべきじゃない。だから、君たち自身、まず自分の「今」を見つめてほしい。そのそれぞれの「今」がクラスの数分集まって一つのスライドショーになる。自分の「今」にこだわれる奴は、必ず人の「今」にも関心を持てるはずだ。そして心を動かし、エネルギーを受け取るに違いない。その複合体が合唱になる。

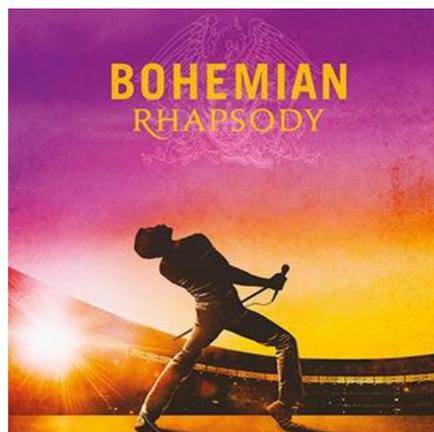
うーん、ワクワクしてきたぞ。

最高の合唱、君たちにしかできない合唱を作ろうね。

ムービーはクラス全体で3分以内という制限があるから、一人約4秒～5秒だ。僕は4秒間の動画よりも、写真を4枚～6枚くらい浮かび上がらせて、君の「今」を象徴的に表現する方を勧めたい。きっとイメージが膨らむ。

もし、僕の17歳時にこんなことが提案されて、4秒もらえたとしたら…

前にも書いたように、あの年は本当に暗い1年間だったけど、それでも選ぶとすれば、テニスコートの片隅でひたすら壁打ちをする後ろ姿。それから冬の西海岸で凍えながら8ミリカメラを回すニキビ面の少年と、濃いコーヒーを飲みながら真夜中にフィルム編集を黙々としている画像を入れるかな。もちろん、バックは「ボヘミアン・ラプソディ」を大音量で。4秒なら前奏と「Mama…」で切れるけど、それはどうでもいい。あの夕焼けの海岸シーンとバックに流れるフレディ・マーキュリーの内蔵まで届いてくる透明だが力強い声は、その後ずっと僕の中に流れている。



20century fox ポスターを引用